

55 【やんぼし】

初秋の大山に山登りに行った家族が、神隠しにあったという話は、長く村中に響き渡ったものでした。

もう三か月も戻ってこない。

その間も大山の天候は穏やかでした。

今まで村のこどもが神隠しにあったことはあったが、家族がそっくり神隠しにあったのは初めてきました。

ここは懐爺の出番だとおもったかどうか、たぶんおもったのでしょう、ぼくは懐爺のところに走りました。

「せつないのう」

ぼくはいいました。

「かみかくしは、おぼけなんか」

「かみかくしもおぼけの一種でしょうが、これは【やんぼし】のせいでしょう」

「【やんぼし】たあ、なんじゃ」

「金ちゃん、山伏とか山法師とか、知ってるでしょう。それを【やんぼし】ともいいます。ですから、もしかするとおぼけではなくて、人さらいかもしれません。おぼけを騙（かた）った人さらい」

「よけい、せつないのう」

ぼくは奥歯を噛み締めました。

「なんとかならんのかのう」

「金ちゃんのたのみなら、わたしがなんとかみつけだしましょう」

懐爺はぼくに、いくつかのものを持ってきてほしいと頼みました。

ぼくは母親にないしよで、すぐに用意しました。

懐中電灯と、黒合羽と、地下足袋と、鍬。

鍬だけは何に使うのか、かきもくわからなかったものです。

いずれにしる懐爺は、深夜に大山に登って行きました。

黒合羽を纏い、地下足袋を履き、懐中電灯を手にし、鍬を担いで。

懐爺にいわれてぼくは一旦帰ったけれども、その夜は眠られませんでした。

そうではない、眠ったのです。

夢を見たのだから。
心臓のあたりに、瘤（こぶ）ができて、大きくなる。
みっともないから誰にもいえない。
みるみる大きくなって、自分の身体よりも大きくなる。
仕方なく自分で手術することにして、包丁で瘤を切り裂く。
血飛沫（ちしぶき）があがり、中から登場したのは、桃太郎ではなく
懐爺でした。

血塗れの懐爺は、鬼の形相でした。
ぼくは懐爺が、とてつもなく悪いことをしたのだと確信しました。
たとえば村人皆殺しとか。
それで懐爺をふたたび、瘤の中に戻そうとしました。
でもうまくいかない。
四苦八苦して大汗をかいて、目が醒めました。
ぼくは母親に書き置きをして、夜明けとともに家を抜けだしました。
祠に着くと、懐爺はすでに大山から戻ってきていました。
懐爺は汗まみれでした。
懐爺はぼくが貸した、懐中電灯と黒合羽と地下足袋と鍬を返してくれ
ました。

「かいじい、なにをしてきたんじゃ」

ぼくがきいても、今回だけは懐爺は、黙して何も語らなかったもので
す。

ぼくがしつこいから、懐爺は困った表情で微笑しただけでした。
だいぶ待ったけれども同じ事でした。
しかたなくぼくは、家に帰りました。
母親が起きていて、行方不明の家族が大山から降りて来たといいました。
た。

わけをきいても、何も覚えていないといったらしい。
学校帰りに役場の前を通りかかると、村人が数名集まっていて、こん
な話をしていました。
大山で、三人の山伏が、助けを求めていた。
首まで土中に埋まっていた、半死半生だった。
病院に担ぎ込んだが、三人とも記憶喪失になっているらしい。

すぐにぼくは、懐爺のしわざだとわかりました。
家に帰らずそのまま祠まで走ったけれども、懐爺はいませんでした。
いくら待っても、帰ってはこなかったのです。
懐爺は、行方不明になったのです。
(かいじいは、じんせいのささぶねに、なったのかのう)
ぼくは懐爺の言葉を、おもいだしていました。
「わたしも行方不明になったら、絶対に探さないでください」

* * *

懐爺にはその後一度も、会うことはありませんでした。
祠の入口には、柵が設けられました。
その頃ぼくは懐爺に、どうしても教えてもらいたいことがあって、それは、おばけがでたときのお呪い（まじな）いでした。
そのお呪いをすれば、おばけが消えるというお呪いではなく、そのお呪いをすれば、おばけと会話ができるというお呪いを教えてもらいたかったのです。
しかも、【どくまる】との会話の百倍も。
懐爺はいつ行っても何度行っても居ません。
「とっくに死んでいるんじゃ」
と村人は噂していました。
「象と同じで、おばけにもおばけの墓場があつてのう。そこに行ったんじゃ。あれはどうかんがえても、〈おばけじじい〉だもんな」
たとえもしそうだとすると、ぼくは懐爺の幽霊に会えるはずだとおもい込んでいました。
四年足らずのつきあいだったけれども、懐爺とぼくの関係は祖父とぼくの関係の、百倍も濃密だったと信じていたからです。
ぼくは懐爺の幽霊に会いたくて、祠の近くを毎夜彷徨（ほうこう）したが、どうしても会えません。
そうして、どういうわけか、その後は幽霊どころか、一度もおばけに

も遭うことがなかったのです。

けれども、たしかにこの目でみた、【うきもの】や【がしゃどくろ】や【せんじゅ】や【なんじゃこりゃ】や【ぬらりひょん】の映像は、いつまでも目の奥に焼きついています。

懐爺の、懐かしい思い出とともに。

あれから、半世紀。

ぼくはずっとおばけとその仲間に関する本を、読みつづけてきました。

妖怪、怪異、物怪、怪獣、化身、悪魔、悪鬼、鬼神、魔神、幽霊、死霊、生霊、悪霊、夢魔、毒魔、などなど。

なかでも上田秋成の『雨月物語』と、小泉八雲の『怪談』と、泉鏡花の『高野聖（こうやひじり）』は、ぼくの愛読書になったものです。

おばけとその仲間とはまったく関係のない本でも、それどころか女性しか読むはずのない雑誌でも、その表紙に「妖」とか「怪」とか「化」とか「異」とか「鬼」とか「霊」とかが、かいまみえると、それらも必ず読んできました。

「何とか異聞」などという、歴史・時代小説までも。

小説とか研究書だけでなく、漫画とか画集も。

たとえば、水木しげる、白土三平、つげ義春の漫画や、清宮質文（せいみやなおぶみ）の版画集は、繰り返しみつづけて飽きなかったものです。

水木しげるは、ぼくにとっても、おばけの宣教師でした。

白土三平の創る忍者達は、何かと解説が入っていても、ぼくにはおばけにおもわれました。

つげ義春の漫画に登場する人間の多くは、おばけっぽかった。

清宮質文の描くおばけは、哀愁があって、ぼくの好きなおばけの見本でした。

それで、ひとつの結論を掴んだのです。

半世紀かけて、ようやく。

おばけは、いる。

悪鬼や幽霊のことはわからないけれども、おばけは、いるのです。

【じめえ】も【たいようかめん】も【ぼくはつ】も【ぶあいそがらす】も、もちろんいるのです。

そうして、乞食でも忍者でもない、おぼけの中のおぼけ、偉大なるおぼけ、【かいじい】。

おぼけは、いるのです。

もしこの世が、未だ闇でないとしたなら。